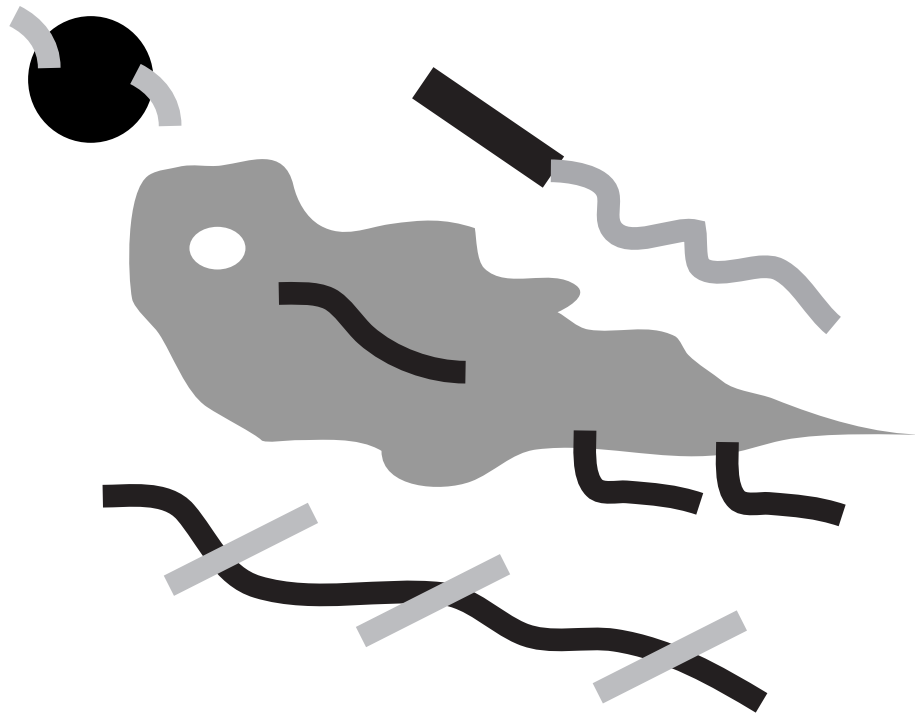

月 刊

MéLange

VOL.96



2014.10.19

詩と評論

月刊

「MéLange」 VOL.96

2014/10/19

月刊「MéLange」編集部

詩 & 俳句

自選30句「青貝」〈俳句〉……………寺岡良信 03
 渦小景……………野口 裕 04
 突然蒸気と火山性物質が噴出する現象の夢想……………岩脇リーベル豊美 05
 発泡スチロールの蠱惑……………中嶋康雄 06
 やちまた……………千田草介 07
 音楽……………月村 香 08
 雨が降っている……………御着かおり 09
 伝説……………寺岡良信 10
 キリン島……………黒田ナオ 11
 液化……………大橋愛由等 12
 瓢箪のくびれ〈俳句〉……………高橋雅城 14
 高原に面影が立ちあがる……………有時秀記 15
 肆の夢 上(ゴジラがでるぞの巻)……………高谷和幸 16
 ソラマメ——ピタゴラスに……………福田知子 17
 残炎……………上野 都 18
 秋のホルン……………富 哲世 19

エッセイ

<詩人通りより>16「人類の薄明という世界終焉」……………岩脇リーベル豊美 13
 <神戸詞あしび>85「奄美のうた紀行 秋のおとずれ」……………大橋愛由等 20

編集部日より★17/第96回目の「Melange」例会は、第一部の読書会のスピーカーに。濱田洋一さんを迎える。テーマは、「南方マンダラ」の行方。わたしも南方熊楠についてひとかたにならぬ関心を抱いていたので、おおいに期待している。南方熊楠が住んだ和歌山県田辺市の家までわざわざ訪れたことがある。そのときはまだ娘さん(文枝さん)が生きていたので中に入ることはできなかった(現在は南方熊楠顕彰館として整備されている)。思うに、和歌山(紀の国)という場所は時を超えて「巨人」を産み出す風土かもしれない。弁慶、明恵、華岡青洲、紀伊國屋文左衛門、松下幸之助、中上健次などスケールの大きな人士を多く輩出している。ここは「紀の国」=「木の国」と言い換えてもいいぐらいに、山と樹木に覆われた場所であり、そうした広大な山間部(あるいは闇)を取り込んで、環境が成り立ち、かつ有為な人間を産み出すのだろう。魅力の尽きない場所である。(大橋記)

寺岡良信 自選 30句

青貝

青貝に余命をとへば雨季がきて
 処女といふ寂しき刑よローレライ
 薔薇咲いて閔兵は死者ばかりなり
 殉難の鶴冴え冴えと海の紺
 冬薔薇砂丘は波の縛に就く
 落葉して知らない国へ馬車を駆る
 辛夷咲くかの世の空の残寒に
 夢でのみ泣く青貝の朝の風
 嘲りは模様 of 皿の女より
 谿に月冴ゆれば鮎を身ごもりて

満月の火傷が疼く洞窟画
 土器匂ふ明けの銀河の滴りに
 どこまでも風月明の抜錨は
 潮鳴りや星座に還る入植者
 船艙の微熱の母よ孕みゐて
 喀血の羊を加へ燃ゆる雲
 海女の像水底の井戸汲むために
 逃水に槍を放てば森が哭く
 雪来るとささめく星のカルデラ湖
 洗骨や石器時代の夕映えに

麻酔医のサティイの笑ひエーゲ海
 げんげ田のカゴメカゴメが招く闇
 驚眠るまなこの裏の禁猟区
 時刻表終着は真夜どの峽も
 蒼々とツバメの舌に海燃えて
 冬麗忘却といふ刃こぼれも
 鯖雲か受話器の奥にうごくもの
 石棺の木乃伊の息よ野ばら散る
 海鳴りに血便漏らすキチジロ
 ホルン吹き夜を惜しむかに吹きとほす

◆渦小景

野口裕

時はひと色
決して多色の水彩とはならない
なるのなら青い時に倦んだ人は
赤い歴史に乗り換えられようし
赤い歴史に疲れた者どももの
青に混じらんとする滲みも
見受けられるだろう

だが画然と
ひと色の時は因果を重ね
日時計ほどのぼやけた影も
永遠の時で割れば大したことはない

退屈を紛らわせようと
人は因果をぐるぐる巻きに
円環状の小さな物語を

いくつも紡ぎ出した
遠い昔のそれが
今も夜空に名残として散らばっている
退屈と言えば退屈きわまりないが
因果の渦を巻き取ることでしか
因果は交錯しないのだから仕方がない
(交錯を言い過ぎと揶揄が飛ぶ)

今日私は小さなクモのために
ささやかな物語を作ろうとした
クモには毒があるのだそうだが
サソリほどの星座はない
暗いわずかな星を結ばんと
金平糖五六個を紙飛行機にくつつけて
ゴム動力で飛ばしてみたが
南の風には乗ったかな？
暁け方の星は甘い
いささかでも渦の巻きに貢献したなら
さて、嘘の糖度でも測りましょうか？

◆突然蒸気と火山性物質が 噴出する現象の夢想

岩脇リーベル豊美

彼女は夢想した
大陸は綿菓子でできていると
素敵な傷を刻んだ踵の躍動は
今なお霧の朝に沈んでいる
土星が足もとを逍遙し
風は膝で暗く集っていたが
夜が明ければ
風景は檸檬色に染まるだろう

綿綿と
季節は流転していた
縷縷として
時間は言問うていた
彼女には
獲物を射とめるとき地震がとまらない

甘い言葉をたどり
浮遊する大地に歩みを掬われると
ふと霧は糸のように散り
彼女の目交いには
空気で膨らむ牡鹿が姿をあらわす
あれはあなたとわたしがいた場所
悲しい眼で微動を嗅ぎわかる本能
予兆なき奔出を背に知覚すると招魂ははじまる
無量の絡繰りが壊れた世界をからめとってゆく痛みを
彼女はただ傍観しているのではない

◆ 発泡スチロールの蠱惑

中嶋康雄

食べられる真夜中
 発泡スチロールがキュッと音を出すと
 黄色い毒蛾がふさふさと
 毒をまき散らしながら橋を覆い尽くす
 蛾は口がないのですぐ飢え死にし
 川を毒蛾の荒れる死体と発泡スチロールが
 こすれあいながら流れてゆくが
 蛾は死体のくせに
 性器をめいっぱい開いたり膨張させて
 もとめている
 発泡スチロールがただの物体のくせに
 蛾のもとめに応じて鳴いている
 蛾の死体は白い発泡スチロール上で
 身体を震わしている
 やがて蛾の精液が

橋の欄干をグニヤグニヤと伸びて
 川縁のビルの壁を這いずり回る
 黄色い毒蛾の鱗粉が
 空を覆い尽くす
 信号を待つサラリーマン生活が
 川底に引き摺りこまれ
 暗い川底を彷徨っている
 満員電車がやって来る
 発泡スチロールが痴漢を楽しんでいる
 発泡スチロールが卵を産んでいる
 卵はすぐに孵って
 毛虫になるが
 毛虫の顔がサラリーマンの顔であり
 ぞろぞろと通勤を始める
 毛虫は残業の果て
 蛹になり
 発泡スチロールの繭に籠もるが
 空気が吸えないので死んでしまう
 発泡スチロールの繭から出てくるものは
 歪んだ顔のモヤモヤした幽霊だけで
 永遠に橋の上で通勤を続ける

◆ やちまた

千田草介

どうやらタコ足配線のために行先表示の明かりが線香花火のように
 ポシヤンと消えてしまったバス停にたたずんでシャボン玉をふくら
 ますとホログラムの地図なのか年表なのかをもった老人が目の前に
 立つて救世主(メシア)はここに何百年前に現われたから何年後に
 ここに再生するはずだと宣言した。

蜘蛛が八筋の縦糸を張るのを見ていてなるほどこの連中は脚が八本
 あるんだからこういうことは朝飯前なのだなと思う一方でその脚を
 もいで口にほうりこむとチョコレート味がするものの本に書いて
 あった記憶がよみがえるのだが巣にかかった朝飯を食う蜘蛛をい
 くらなんでも朝飯にはできまいよ。

部分日蝕のとき八朔をかじって太陽もこんなに酸っぱいのかなと考
 える少年に八月のクマ蟬の抜け殻って驚ボールの皮に似ているねえ
 と言ったとたんそういえばむかし幼稚園のおやつの時間に僕らはそ
 れを爆弾ボールと呼んでいたのだと思いだして木にしがみついたキ
 チン質の中に黒色火薬をつめこむ。

八方美人とかけて八面六臂とくそのココロはと大喜利で吹っかけ
 られて南都七大寺の諸仏諸尊をつらつら思い浮かべるが十一面であ
 ったり千手であったりとなかなかそれらしい美人がいなし変化は
 ヤマトナデシコにしても七つが相場だから七と八とで整合性がつか
 ないのだと奈良漬を口にして思う。

ヤマトノオロチを酔わせた酒はアルコール度数は低かつただろうし
 しかも八つの丘八つの谷をまたぐ巨体にして背中に松林がはえてい
 るという相手だからよほど大量に醸造されたにちがいないがそれを
 テナヅチ・アシナヅチの老夫婦はふたりしてやってのけたのである
 からよほどの巨人夫妻だったのだ。

またも負けたか八連隊と全国から軽侮された気の毒な大阪連隊の系
 譜を維新八策とかいう旗印をかかげた政党は受け継いでいるものと
 みえ格好はつけてもアホ坊んのあつまりゆえに大川で花見の屋形船
 を出してどんちゃん騒ぐのと異ならずはじめは大目に見ていた大旦那
 那衆も眉をひそめて勘当におよぶ。

高田の背番号も知らないくせにとさだまさしが歌ったその番号は8
 なのであり長嶋のそれとはたしかに知名度がちがうのだが他球団の
 8をつけた選手ではたして高田以上にテレビに出た人はいらるだろう
 かと考えたとき歌い手の詐術に気づいて巨人がよく負けたのは長嶋
 監督1年目だったと思ひ出すのだ。

エイトマンの主題歌は幼時から耳に馴染んでいるがそれを歌った克
 美しげるが愛人を殺害する事件をおこしたために彼の歌声がメデイ
 アからしめ出されてからもうずいぶんになると気づいたときその訃
 報に接し彼の名に「さん」付けがされていることから服役ののち社
 会復帰して人生をつづけたと知る。

◆ 音楽

月村香

ラジオから流れる生のままの音しか聞いていなかったのだからゆる情報はシャットダウンされてうたっているのが誰であるのかも永遠に知れない心臓のあたりが痛みが走るそれは英語でありながらシャンソンにもまたインストロメンタルにも響いてくるのでさっきまでしていた勉強を全部捨ててもいいほどのやすらぎがこちらにこようとしているそれは曲を聞けばわかる最後までともにたどれば完了し完結してしまう芸術というものの悲しさをいつも耳をピクリとさせながら君はのがすな

◆ 雨が降っている

御着かおり

涙がラムネの味になる白昼

鯨は歯の治療に余念がないけれど

魔女は伸びた爪で天空に薔薇の花弁をせっせと貼っている

獅子はバケツをひっくり返してしまつて

コインランドリーでは血を洗う

S極とN極の針を刺したら

switch on

デトックスなんだってね

植樹した森に雨水が流れをつくっている
溜璃揚羽がその型を浮かびあがらせた

わたしとわたしをぶつけて鱗を落とすと
またラムネの味がした

◆伝説

寺岡良信

この日も――
霧に穢^{けが}れて谿^{たに}をくだる
旅人の歩みを
伝説がとめた
石棺に横たはるあなたの息が
野ばらを散らすのだと
峽^{かみ}のはざまにたそがれは早い
伝説は語りつづける
星座の流転を惜しんで
木乃伊^{みい}は夜も息を洩らすのだと
死の眠りの浅瀬で

◆麒麟島

黒田ナオ

麒麟島はときどき見えてくる
背の高いビルが
よきによき伸びるオフィス街の谷底で
まぶしい空を見上げていると
ぼんやり見えてくる

きらきら光る麒麟島
ラッパが鳴っていた
胸に響くラッパ
虹の橋を渡るときみたい
聞こえても聞こえても
すぐその端から忘れてしまう透明な
響きだけの音楽が
胸に高らかと伝わって

ノックしている
見えない扉の向こうで
懐かしい誰かが
笑いながらノック

雲の停留所に
もうすぐ青空のバスがやって来るのがわかる

◆液化

大橋愛由等

一直線にカッターでMESAに傷をいれるとほのかに白い汁が滲み出てくるありさまがおもしろくて何度か刃をあてるのだが美麗な直線でないと液はでないし定規をあてて引いてみてもMESAは拒絶してしまう

くりかえし汁をだすと疲れてしまうのかいずれ出なくなりいつもはそれで止めてしまうのだけれどその晩は皆既月食だからという理由で自傷行為に似せて憑かれたように月光が射す角度にあわせて傷をつけてゆくとMESAはあきれてしまったのがガラス板のごとく表面を硬直化させて刃痕をたたせなくしてしまった

翌朝に昨夜つけた傷の数をかぞえようとMESAに近づくと一冊の語録集が置かれていたのを発見しタイトルは『純粹理性を液化してみれば』と刻されていてことうしたMESAからのメッセージはかつても経験しているのだが昨夜のぼくは少しくどかつたのかしらと自省の念をいだきながらひもといてみる

そこにはこの八年間にぼくがMESAに向かつて語りかけたコトバの数々がこと細かに記されていてよくもこれだけ覚えていたものだと感じつつこの語録集はきつと「あなたはなにも語っていない」と言いたいのだろうと推量してMESAに天竺綿でしつらえたテーブルクロスをかぶせようかと思ひなすのだから

MESAが求めているのはカッターで傷をつけることでもテーブルクロスをかけることでもないことは分かっているつもりである。ぼくは液化した純粹理性がテーブルクロスにしみ込んで染色してそこにとどまるのか蒸発して虚空を浮遊しサシバにつつかれるのかあるいは排水溝に流れてやがて海にたどりつき鯛たちの滋養になるのが気になっているのである

『人類の薄明』と題されたアントロギーが、通りかかった大手チェーンの本屋の抒情詩売り場に平積みになっているのを見つけ、きつと、大学の独文ゼミか、ひよつとするとギムナジウムかもしれないが、新学年度も始まり授業で扱っているのだろうと思ひ、変わらぬ装幀に懐かしく手に取った。

この書は、もともとドイツ人作家クルト・ピントウス (1886-1976) の編纂によつて、『最新詩歌のシンフォニー』という副題で一九一九年にクライン出版から出されたものであるが、一九二〇年以降ロロロ伝記叢書などのローヴォールト出版から版を重ねている、ドイツ表現主義といわれる文芸運動の抒情詩を集めた詞華集である。わたしの蔵書は、第二次世界大戦から復興がすすんだ一九五九年の再発行後の第五版で古書店で求めたものであるが、『ある表現主義のドキュメン

ちの四人が第一次世界大戦で命を落としている。その一九一〇年から二〇年の十年間に表現主義の理念として、以前から予覚されていた(社会、政治、道徳、芸術、文学などの)構造への嫌疑が、既に19世紀の市民社会がもたらした価値やモラルを背景にして、主に戦争への道、大都市の状況、その崩壊、そして自我喪失および世界終焉(黙示録)の不安という「もつとも荒々しくもつとも混沌たる世界史における時代」の主題や動機のかたちで聞いて取れる。人間疎外の呈相がその中心に据えられていて、表現主義画家たちが後にナチス政権によつて「退廃芸術」としてレッテルを貼られたように、一九三三年に国内大都市でなされた焚書ではその憂き目にも遭っているのである。

ピントウスは一九一九年の序文でニーチェの詩論と見紛うような、観念論による非観念論的新しい「人

詩人通りより／16

人類の薄明という世界終焉

岩脇リーベル豊美

ト』なる副題に改められていた。後に「我々の世紀において『人類の薄明』ほど引用され、印刷された詩集を他にみない」と編者自身が省みるほど、次世紀にわたしが手に取ったものは第36版にまで達していた。日本語では河出書房新社より一九七一年に高安国世氏訳で世に出ているが、寡聞にしてその考察の展開をよく知らない。

このアントロギーは『没落と叫び』『心の目醒め』『波乱と反乱』そして『人間への愛』の四章からなっている。そこにはゴットフリート・ベン、テオドール・ドイブラー、アルベルト・エーレンシュタイン、ゲオルグ・ハイム、エルゼ・ラスカーシュユラー、ゲオルグ・トラークルをはじめドイツ語圏の表現主義詩人23名の二七二編の詩が取められ、そしてココシユカ、レームブルック、シャガール、シレーなどの同時代の画家の手による詩人の肖像画がちりばめられている。23人の詩人のうち6人が初版前に死去し、そのう

類」と身体「表現」の理念を展開していることが興味深い。「(ここに集った詩人の)共通点は、感情、志向、表現、形式の強度およびラディカリズムである。さらにこの強度、ラディカリズムは詩人らをして、終焉に向かう世代に属す人類に対しての闘争、および新しくよりよい人類を熟慮する態勢と要求を強いるのである。」(S23)しかし、この人類生命の新たな可能性

への強烈狂信的な探求は、カオスの世代の詩作のなかで、世界大戦の帰結としてではなく、戦前すでに啓示されていたプログラムだという。表現主義者たちは一切の詩的言語の価値転換を指揮し、同調主義に逆行する作品の再評価を後押しするプログラムを立てた。その第一人者のベンが(彼は一時ナチスを支持したこともある)、「同世代の真の表現主義者」は、その混沌とした体系と過去から脱して、他のどの世代も体験することのできないであろう激しい内的圧迫の展開に圧倒され、新たな結束と新たな歴史的意義の形成へと向かっ

たのだ(Gottfried Benn: Lyrik der expressionistischen Zeitalter. Von dem Wegbereitem bis zum Dada. München 1974, S.14.)と回想するが、編者ピントウスも同世代なのである。我々の時代の詩作は終焉であると同時に萌芽であり、「より幸福な人類のための純粹形式」を見出す権利を持っている。「この未来の人類が『人類の薄明』を読むときに、人間に対する希望やユートピアへの信仰として何ものも存続しないような、憧憬に満ちた呪詛の列挙を非難されませんことを。」(S32)と結んでいる(とわたしは解釈しているが、この解釈が誤謬でなきことを祈っている)。

その後の大戦を経て、アドルノの『文化批判と社会』の言葉——文化批判は文化と野蛮の対峙する弁証法の最終段階である。アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮であり、それはまた、今日詩を書くことができなくなった理由を言挙する認識を食い散らすのである——に慣れ親しんでいる未来の詩人にはむしろ、驚きなのか新鮮さなのか、ベンやピントウスの言葉が、逆説的にそれを擁護するようににも思えるのである。Ich-Beginneを詩的に訳せる気がしないが拙訳。

ジントーゼ (1917) ゴットフリート・ベン

沈黙の夜 沈黙の家／わたしもまた最も静謐なる星だ／わたしはわたしだけの光りを／

わたしだけの夜へと放出する

いまわたしは脳内的に帰郷した／洞窟から天国から汚穢から畜生界から／女になお授かるものもまた／暗く甘い自洗

わたしは世界を押しならす 略奪の重い息をする／そして夜夜には幸福にあつて全裸でいる／死と闘うのではない 塵埃の臭気はない／わたしをわたし概念を世界へもどすのだ

(Kurt Pinthus (Hrsg.): Menschenscheidämung. Ein Dokument desExpressionismus. 5. Aufl. Hamburg 1963. S. 187.)

◆瓢箪のくびれ

高橋雅城

既出二十句

ここに俺ここに勤労感謝の日

去年今年貫く棒の如きもの 虚子

ドーナツの穴のあたりに去年今年

つるさんはまるまるむしと炭おこす

焼藪を二つに割ってプロポーズ

波の花それにつけても花かつを

ワッフルも二つ三つ焼け春隣

恋よりも匂う三月メロンパン

エイプリルフルにキョーレオピンを飲む

ひそひそと言うな女よ亀なく日

カナリアは鳴いてくるりと春日傘

ペコちゃんが嘘寝しているはるやよい

熱愛をひとまず終えて豆ご飯

午後あたり柳川鍋のいじわるな
集まっていやよいやよとごきぶりは

腐りつつ泳ぐ鯖とは自慢げな

洋食は鱧のフライが神戸かな

長崎を消しゴムで消す原爆忌

前衛は淫ら八月十五日

瓢箪のくびれあたりに夜きざす

眠き人たすける閏九月かな

今秋二十五句

もてあそぶプルトニウムの八・一五

終戦日姉のあくびのその長く

エマニエル夫人むこうに秋暑し

たましいの余白ちりちり秋風鈴

岬へと帰る友あり秋螢

いずれかのこころゆらゆら撫子の

いい加減コスモスやめて天にゆけ

塩むすび大ぶりにして曼珠沙華
花野へと一つピンポン玉消えて

今日までの縁としましよ猫じゃらし

藪枯らし娘は不良妹もまた

ここからはわたしあなたは秋になれ

たんぼのぼのあたりが火事ですよ 稔典
どんぐりのぐりでポケットふくらんで

いいかげん生きてみたけど野菊摘む

久しぶり葛に巻かれて没落で

しりとりをする少女へとこぼれ萩

嘘をつききみのバツタに怖い怖い

この辺でさよならしよう稲つるび

爪そめぬ人と暮らすやさつまいも

きみはいま走る哲学ぎくろ割れ

十月はテールシチューの眩きに

かけおちは月なき十三夜のあたり

来し方の秘密あばくや胡桃割る

無花果をつぶし十七歳の夜

鬼灯や男の兎が男に変わる夜

◆高原に面影が立ちあがる

有時秀記

高原の道は人の歩く姿をほとんど見ない。その道は林立する樹木の息吹をあまねく受けている。林立する樹木群の前方は雑木林であり、後方は自然林が小高い森を形成して、樹々はおのずから天を指向する。緑の生命の群は、その息吹で歩む人を包んでいるが、それに触発されて、歩む人の胸には、祖の面影が湧き立ってくる。

心に抱かれた面影を見定めるため、歩む人は『詩経』の言葉に心を深くとどめようとする。歩を休めて道のはずれにある社にとどまり、古代の声を聴くために『詩経』の頁を凝視する。林立する樹木が反応しているのか。頁を繰るその指先が熱を帯びると、地に落ちた干からびた虫と葉の残骸は風とともに飛び散り、いづこへか霧消するが、霧消した先は文字通り霧の領域である。いつぼう、社には緑の息吹が満ちている。古代の頌歌が高原のひとときわ高い樹木を形代として立ちあがる。《南に高く繁れる木。つたかづらこれにまつわる。祖霊は降臨して楽しみたまい、幸福を約束して下さる》

さてこの古代の頌歌が立ちあがると、歩む人の顔は蝉の脱けがらを仮面のようにかぶり、みずからもまた、祖の形代になって面影の美しさを憑依させている。そうして美しい面影が仮面の内に満ち足りると、蝉の脱けがらは剥がれおち、歩む人の顔には満面の微笑みがただよう。瞬時ののち、その微笑みは林立する樹木群からはるかに飛翔し、淡く輝くひかりを歩む人にとわに注いでいる。

◆肆の夢上（ゴジラがでるぞの巻）

高谷和幸

夜になる。

（夢を流れる河

…表面と見える近接さから…

五感のスクリーンが流れていた。

流れるがそのものの上にかぶさって

新しいものに壊れてしまった流れるしぐさ

それがいつしか流れることが水から火になる

…さかいめのかなしみ…

夢のプリほどき）

よりしろは一つ

また一つ

そのよりしろの上に置き換えながらぼくたちは

夢を歩いて行った。

お城に続く黄色いアーケードの下を散歩していると

「骨董店がいいだろう」と庭が言うので

店の軒先にある青い床几の上に置いてやった。

（骨ニヨリ

白い色の

名もないような

人であったものたちに触れているつやつやした傷

吊るされて

人知れずくぼみ、腐敗する

「触れる」ことのできない被膜との官能。

触れる

「ふれる」が夢の五色に縁れている

…骸のアナコルーソン…

そのとき、ぼくを庭がそう呼んだ。

ぼくたちがそうなのだとき思った。

…サ・カ・イ・メ・カ・ミ・シ・メ…ル

どうやら、水が燃えているらしい。

腰を落ち着かせた庭は白い髭を生やした老人になっていた。

手元に四角い御膳を置き

鉢の中には煮物が入っている。

アナドロマスの泥色は色順にそぐわないから

その皮を剥ぎ

赤い肉のような顔をして酒を飲んでいる。

（プリの さらなる

プリの、頁）

来た道は、臍の奥だよ。帰る道は、また臍の奥だよ。

ふうーと吐いた息が

アーケードの軒先をこえて護国神社の木立の間を抜けてい

った。

（イリヤ（ある）、ほとんど無であるあつみ

ふうーと等しく、ふうーつ）

*プリ（襲）

*アナコルーソン（破格構文） パラバシスやアナコルーソ

ンは物語の筋を中断しすっぽかすといったアイロニーを構成

するレトリックである。ド・マンの言語観による。

（編集部註／この作品は「月刊めらんじゅ」95号に掲載されたものを一部加筆・修正したものです）

◆ソラマメ——ピタゴラスに

福田知子

その昔 ひとびとは数字には意味があると考えた

その昔 ひとびとは数学は魂を浄化するための道具だと考えた

ピタゴラスの定理 憶えていますか？ 直角三角形の斜辺の上に立つ正方形の面積は、他の二辺の上に立つ正方形の面積の和に等しいという定理それは中学校で習った。しかし、ピタゴラスには、なんと魂の話もあったのだ

世界の根源は数である！ ピタゴラスは靈魂の不死と輪廻を信じ 靈魂を救う目的で南イタリアで教団を組織 宇宙の調和の原理を数に比例させたこの「ピタゴラス教団」の資料はきわめて少なく実態は明らかではないが古代ギリシャ・オルペウス教の影響をひきつぐ輪廻転生と原始共産制を敷いており 教団に入る第一条件は財産を共有することであったという さて、この教団には〈数学研究重視派〉と〈宗教儀礼重視派〉のふたつの宗派があり後者には《ソラマメ》を食べないという禁忌があったそうだ

ソラマメは古くから世界各地で栽培された 原産地は地中海と西南アジアで紀元前二五〇〇年から食用にされたがどうも死者と結びつけられたようだ イタリアには古くから「死者のそら豆」というお菓子があつて 細かく刻んだアーモンドと卵白に砂糖を混ぜたものを死者の日に食べた 古代ギリシャ人はソラマメを葬儀に用いた 古代 ソラマメが不吉として厭われたのは 花弁の黒い点が死を連想させたからだ しかし「ピタゴラス教団」でソラマメを避けるのは、これとは異なる理由からであった ピタゴラスは考えた

ソラマメの中空の茎が冥界ハーデースと地上とを結んでおり豆には死者の魂が入っている……と

さて ソラマメとは何か？ 一書にいわく——和名の由来は さやが空に向かつてつくから「空豆」あるいは 蚕を飼う初夏に食し さやの形が蚕に似ているから「蚕豆」という字もまたあてられた ソラマメは 秋に種をまき 花は三月から四月 薄い紫の花弁に黒の斑紋のある直径三センチほどの白い花を咲かせる サヤには三〜四個の種子を含む

ん？ 三と四の数字で成り立つてるんだ ソラマメって！

これは ささやかな発見

でも ちよつとウレシイ発見

私の発見はピタゴラスの定理には程遠い極々他愛無いものだが ソラマメの三と四の豆宇宙について ピタゴラスに尋ねてみたいものだと思つたきつとカバラ数秘術とか出てきてスラスラと説いてくれるに違いないのだから

——ソラマメ ト 語り明カセバ ピタゴラス

——ソラマメ ヲ 死者ニ捧グ 十六夜譚

——ソラマメ ヤ 天ニ向カイテ 数喰ラウ

——ソラマメ ニ 聲ヲ重ネテ 相似形

——ソラマメ ノ 形ヲ真似テ 生レニケリ

◆ 残炎

上野都

ほんのいつときを切り取れば
わたしの名前になるが
それを明かす闇には足らず

ひとつ
ひとつ
ひとつ

薄く枯れゆく秋の丘
その丸いくぼみに溜まる崩落
食いつくした跡のけもの道を
もういちど扶るように

どれほど指を折つても
ゆき暮れる陽の名残り

背を砕かれたまま

伏して なお

ひとつ

名前というおまえの孤光

天と地をさかさまに映せば
わたしの道標が一本の矢となり
おまえの胸を貫くだろう

陽が照らすあいだに

わたしの。

風を刺し

みりみりと押してゆく影の

◆ 秋のホルン

富哲世

台風一過

しずかに雄々しく秋のホルン(たましい)が鳴る。

きのこのはびこる住宅街のまだらの林に

神経症の昆虫や

手足をもがれた仮名の林檎が

居場所をなくして咳き込みながら隠れている。

くずれていく微小な塔を讃えながら

わたしの後ろにも

突き当たること

通りすぎることもできない

生きる苦しみは健在なのだ。

その届かない不幸の時間をなくしながら

押されるようにバスを降り

押されるように小さな坂道を下る

名乗らぬ部屋のほとりに。

まだ間に合う

そう言いかけながら

熱い紅茶を啜りたい

出口のなさに入っていく。

えんじの蝶ネクタイをした

黄いろい熊が

浅紫に揺れている。

恐怖の世界でなにも恐れてはいない

嘸みしめる少女には眼鏡の奥に

幾通りもの気付かれない罫や

めげる気持ちのバズルがあるのだ。

ひとつの説明にすぎない

その不可思議に気付いて

わたしは山の病院へ行くための

バスを待っている

この遣り方には

逃れるすべがない。



奄美の集落と海

奄美うた紀行 秋のおとずれ

十月は関西に二週続けて台風がやってきて往生した。一方、奄美群島は、台風が通過する頻度は関西どころではない。しかし不思議なことに大きな台風が襲来しても人的被害はほとんどでない。台風への備えは万全だからなのだろう。もちろん農作物の被害や土砂崩れ、停電などはつねに起こる、生活物資を運ぶ鹿児島からの定期船は台風が来ると一週間寄港できないこともあり、生活に支障をきたしてしまう。

南島より海鳴り遠く聞こえる潮の香におう台風の前ぶれ
久保宣子

奄美で発行されている日刊紙・南海日日新聞には毎月文芸欄が三日にわたって掲載され、短歌、俳句、川柳の各グループが作品を寄せていて、記者が書く記事や投稿記事ではないもうひとつの奄美の声が反映されているのでいつも切り取って鑑賞している。まず取り上げた作品は海の近くに生きて海の息遣いを敏感に感じる奄美の人ならではの内容となっている。

台風(十二号)去りて涼しき身にしみ恵雨早魁寸前胸なでお
ろす 田邊正裕

奄美は時に長い間早魁にさらされる時があり、台風という大量の降雨が慈雨になることがある。これも意外なことである。海のはてネリヤというも

近きかも杖つく義母の行きしと思えば

寺島正美

島は生と死がいくえにも折り重なる場所である。義母をふくむオヤフジ(先祖)たちの行く末はネリヤという常世であるのだが、そこは毎日見て接している目の前の海のどこにあるだろうという生の延長として実感。こうした生死を間近に感じるというのが島で生活することなのだ。

長月の太陽^{テッ}和らげば庭手入れ妻の差しだす「みぎ」は甘露よ
前里静
幼日の「トネヤ」で飲みしミキの味思いだす日は飲みたくな
りぬ 前里恵津子

奄美には「ミキ」という飲料がある。米粉、サツマイモ、砂糖を発酵させて作られるもので最近はおパックに詰められて売っている。私はこの「ミキ」が好きで、沖永良部島を訪れた時、大きな甕に入った自家製ミキを吞ませてもらう以来、そのほのかな甘さの魅力に一気に引き込まれてしまった。

キュロロロ森に染み入り御霊呼び精霊殿は盆のにぎわい
福田裕生
こおろぎや終わる生命の愛^{いと}しさよきゆらきゆらとふる
える歌声 小松理恵

奄美に滞在している時、夜中、耳をそばだてていると、ヤマトとは違う鳥獣の声が聞こえてきて、愉しく緊張する。奄美の鳥の鳴き声はまさに精霊の化身か使徒のような響きがある。またこおろぎの音が「きゆらきゆら」と聞こえるという表現も面白い。「きゆら」とは「美しい」という意味(美人は「きゆらむん」となる)。さらに倫理的な「清さ」の意味も込められている。

二百余年常磐見守る榕樹は力つきしか道路に倒る 龍青子

地面に頑強に根を張っていくたの台風にも負けずにシマ(集落)の光景のひとつとなってきた榕樹も二百余年の生命をとじることになった。シマとともに在った樹木へのいとおしみは深く、自然とともに生き続ける奄美の人たちのまなざしもまぶしい。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.96
めらんじゅ

2014年10月19日 通巻96号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円(税込)